

沖

4
2021

俳句雑誌【お花】



尚
径

黒帝

能村 研三

句碑に詠まれた桜

今年の桜は全国的にいつもより早く咲きそうだと言われているが、去年と同様賑やかなお花見は出来そうもない。

今年の俳人協会の「花と緑の吟行会」は市川で行われる。昨年も予定していたが、コロナのため非常事態宣言が出され急遽中止になった。今年は十分な感染対策をとった上で何とか実施を予定している。

下見を兼ねて、吟行地となる真間山弘法寺の伏姫桜の開花状況を見に行った。三月十一日の時点で、伏姫桜の枝垂れた枝が地に着きそうな部分に何輪かの花をつけていた。あと二、三日もすればかなり咲くのではないかと思われる。

同じ境内にある染井吉野の桜は蕾が膨らんでいるものの開花はまだのようである。

ここには、富安風生がこのしだれ桜を詠んだ

まさなる空よりしだれざくらかな
の碑がある。以前はしだれ桜の枝がかかるかからないかの所に句碑があったが、昨年あたりから桜と反対側の鐘楼の前に移動してしまったのは残念である。

ところで、先師登四郎が桜を詠んだ句碑は全国に三つ設置されている。

山裾のまだつめたさの初霞
あらためて水火虔しむ七日粥
仮借なき黒帝といふ神の名は
凍滝の刻を封じて修羅の相

青笹に日のあたりたる涅槃かな

涅槃図の遠近合はぬひとところ

外し置く眼鏡が遠しかすみ草

分陰を追ひ追はれしておぼろの夜

春陰や日延べ許さる一催事

鷹鳩に詮無き役を辞められず

その一つ、私の家の近くにある市川学園のグラウンドには

ひらく書の第一課さくら濃かりけり
の三師句碑の一つに登四郎のこの句が刻まれている。

登四郎がこの句を読んだ昭和二十年代は、四月の入学式の頃に見ごろとなり、授業が始まる頃には桜の花も濃くなっていたようだが、最近は地球温暖化の影響なのか三月の卒業式の頃に満開になってしまうことも多い。

二つ目の句碑は愛知県岡崎市の大樹寺の境内にある句碑で

睦み合ふごとし雨中の松さくら

この句碑開眼の日は平成四年四月四日で登四郎は「佳き日てふ四の字づくしのさくら句碑」と詠んでいる。

三つ目は奈良県吉野にある

霊地にて天降るしだれざくらかなの句碑で、一昨年の秋に久しぶりに奈良支部の大浦郁子さんたちと東吉野の句碑を訪ねた。いつか實藏寺のしだれ桜が満開になった頃に訪ねたいと思っているが、未だ実現出来な

簪のやうな梅が枝嬰生まる
文机にルーペ耳搔き山笑ふ
山羊の糞ぽろぽろ転び草青む
麦踏みり長塚節の地を踏みり
若き日に遡りたき雪解川
片隅に地鶏固まる春疾風
不機嫌なまま飯蛸の茹で上がる

我が家の白木蓮が蠟燭の炎のような白い蕾を直立させている。もうすぐ開花の時を迎えると思うと、これから三、四日は落ち着かない日々となる。言わば咲き初めの白木蓮を見たいのである。油断すると気がつく頃にはかなり咲いてしまい気急い感じになってしまう。「春眠暁を覚えず」とは言え、ここ数年春になるとやけに目覚めがよい。今年こそ二、三個の花が開いたばかりの白木蓮、それも春暁の姿を拝みたいと願っている。

登四郎先生に「白木蓮の純白といふ翳りあり」という句がある。疾うに先生は私が白木蓮に危惧するところの「翳りあり」に気づかれておられる。白木蓮は神々しいほどの美しさを持っているものの、その「純白」は純白さゆえに昼の日に傷みやすい。蛇足ながら拙句集『風騒』に載せた「咲き初めは千手の祈り白木蓮」は夢見心地に賜った句である。

蒼茫集

永遠

荒井千佐代

どんど了ふ上着の煤をはたき合ふ
地虫出づ己が身幅の穴残し
ぬかるみに筵を敷きて雛の家
*永遠でなきゆゑ励むヒヤシンス
荒波を背に菜の花を束ね売る
引鶴や耶蘇集落に影落とす

予備日

内山花葉

薄氷や全人類の待つワクチン
じゃが芋の芽を搔きをれば春の雷
*葦を焼く予備日の予備日その予備日
葦焼きの風に燻る灰より炎
聞き返すことも会話や水温む
草萌に羽毛一片旅を恋ふ

天へ天へと

田所節子

* 天へ天へと初凧の意志の糸
無色となりぬし勝独楽を掬ひあぐ
潮目くつきり太平洋の四温晴
白鳥の気性の荒き首づかひ
藁を着て一人の宇宙寒牡丹
臘梅の香り天満宮日和

古文書

辻美奈子

理科室はいま北風を飼うてをる
寒月や電池全力放電中
餅に罅あり反省のまだ足らぬ
日脚伸び金の縁ある手塩皿
群青の夜や鰯の頭挿し
* 古文書のやうな日差しよ春隣

鳩になる日

千田百里

* 鷹動かざる鳩になる日を想ひ
啓蟄の地べたがこひし考恋し
目にもものを言はせてマスク二重なり
東風に向き鷗つぎつぎ来て並ぶ
無名指をはね上げ鶯餅つまむ
春の長雨方舟は待つてくれぬ

葡萄前進

池田崇

吹雪かれて雪に縋りつ雪卸す
雪折れと言ふ軒折れも続発し
あたふたと埋もる雪吊掘り出せり
地吹雪に葡萄前進するやうに
大雪に愈々体力勝負なり
* 染み染みと雪は戦ふものなりし

寒 卯 石田 静

* 声掛けて奪ふ産みたて寒卯
棕櫚箒春へ春へと反る構へ
マネキンの脚を遠目に納税期
春待つや開けては閉ぢるランドセル
春装のポメラニアンの気取りやう

連 鎖 小倉 征子

洗ひあぐ籠に連根の連鎖かな
まだ籠るいつまで籠る梅白し
天網を洩れ来る桜かくしかな
囀のかたまりとなる夜明けの樹
たんぽぽに踞み胎児となるおもひ

微 熱 平松うさぎ

* 正論の強さ危ふさ冬薔薇
乾く物振れて尖る寒の入
きさらぎの土は微熱を包みをり
魚氷に上る金継ぎの井戸茶碗
終電の巻き上げて行く春の宵

初日の出 中村 重幸

* 生きものの全てに一つ初日の出
負け独楽の土でいねいに拭きにけり
廃船の竜骨洗ふ冬 怒濤
おもむろに神の衣を脱ぐ初日
冬晴の切口青き硝子かな

亀 甲 に 大橋 松枝

小旋風のくすぐり過ぐる麦二寸
水ぬるむ紙漉小屋の閉ぢしまま
* 亀甲に田の罅割れて寒明くる
閉鎖てふ報せ社門に寒すみれ
着物ほどく母の針目や春の雲

円空 仏 齊 藤 實

教会のとんがり帽子木々芽吹く
春陰や円空仏の黒光り
* 田螺和戦後と言ふは一時代
白魚に日差しの強き四つ手網
休止符を楽譜に残し鳥帰る

鈴 の 音 本池美佐子

雪催ほどけて雨の明るさよ
* 雨は母風は父なり柳の芽
冴返る首甲に残る刀疵
魚は氷に上りて乳歯抜けにけり
加賀手毬振れば鈴の音おぼる月

腕 時計 神山 節子

* 月曜の肌に冷たき腕時計
駅伝のコース過ぎるや探梅行
万太郎句碑マスクのままに読んでをり
東京に等々力溪谷冬青空
寝台特急春曙へ動き出す

神の深彫り 須賀ゆかり

* 山脈は神の深彫り初茜
太陽の真白き朝や冬の霧
冬帽子漁のなき日も浜に来て
暗室に検査の微光久女の忌
寒雀集ひ日溜り大きくす

ひたむきと 磯貝 尚孝

墨の香のほのかに残る初便り
初風呂に浸りて心あらたまる
薄れ日に白を濃くして水仙花
曇り日も臘梅の黄の明るさよ
* ひたむきといふ言葉こそ寒椿

沖作品



能村研三選

風二月太き櫻の黙し立つ

栃木

五十畑悦雄

*ペダル漕ぐ吾子立春の風となる

蔵町をゆく早春の千切れ雲

冴返る腰に日毎の貼り菓

六角の結晶刹那春の雪

木の匂して小寒の朝かな

鍵盤の十指の乱舞淑気満つ

雪しんしん「どいばばらう」と民謡集で

*春遅しホルンの管の遠回り

*冬晴や櫻大樹の肺呼吸

休診の小児科醫院花八手

歳晩の庭樹々の声風の声

銀杏落葉あとからあとから空重ね

天辺の風の抜け道冬銀杏

*銀杏枯る千手観音立つやうに

大寒を穿つ杜氏の仕込み唄

揺るぎなき枯木の秘めし生命かな

忠敬の四千万歩冬銀河

鋤きてなほ春待つ畑の土硬し

雲のかたち生くものに見え春隣

人日のアールグレイに溜むひかり

ブルゾンや山岳系の純喫茶

真つ直の深川運河冬あたたか

待春のフェリーは白くふくらみて

寒夜遇ふ尊者の貌の盲導犬

着膨れてすこし遠目の来迎囃

火酒舐めて北洋漁労長たりし

いたつきの妻がメールの御慶来る

命名の墨濃き太字実千両

市川市

澤田 英紀

熊本

河寄 祐二

神奈川県

加賀 莊介

*傾ぎたる地軸に凭れ冬眠す

黒富士を闇へいざなふ寒茜

転職の訳とつとつと根深汁

翻り高く舞ひゆく蒼鷹

遠吠えに応へ天狼燦めけり

*冬風や富士薄墨に暮れ残り

畦を焼きむすび三つの昼餉かな

春淡し美しき眉もて嫁ぎゆく

家ごとに小さき幸せ蒲団干す

佗助や一重を託つこともなし

*凍空や藍ひと色のグラデーション

あさぼらけ水面湯気上ぐ淑気かな

九十九里の弦は水平初日出づ

大いなる翼翔び立つ冬田道

冬麗の鳥の足跡潮に消ゆ

*瑞兆の寒の御空や茜さす

松の影沈めて重き寒の水

鳩鳥に籠となりぬし大冬木

霊山を目交ひにして菓喰

千葉

里村 梨邨

金光 浩彰

鈴木 和江

牛島 晃江

熊本

石橋みどり

千葉

浜崎喜美子

岩手

小野寺東子

千葉

山本 明彦

平嶋 共代

*勝独楽や少年の目にある未来

ばつたりと負独楽にある潔さ

ラゲビーの勲章のごと泥塗れ

病みの世にぼつと日の差す福寿草

寒の明け再会待つと追伸に

*梅林や暁る香の先山気あり

淡雪や白のべールを纏はせて

牛久大仏見え隠れする冬田道

みほとけの指差す方に冬木の芽

根性葉に育つうまみや蒨稜草

*大鷹の威の舞ひぶりや高嶺晴

寒雀櫻は千の手を伸ばし

箒目の揃ふ神苑初景色

新社殿塵ひとつなき淑気かな

冬海暮れ切るときの叫びかな

*裸木の明日を信じて屹立す

寒中の雨乞ひ神事稲荷山

*密密と育つ青麦風に付く

風強き水辺にまろく春の鴨

柏楨の大樹眩しき存の丘

飛鷹選評



能村 研三

ペダル漕ぐ吾子立春の風となる

五十畑悦雄

節分の翌日にあたる立春。暦の上ではこの日から春になるのだが、まだまだ寒い日が続く。しかし寒気の中にもかすかな春の兆しを感じられ、人々に行動的な動きを促す。まだ冷たい風を切りながら颯爽と街を駆け抜けていく吾子の成長をまばゆく見つめている父親なのだろうか。句の表現の調べもよく、ペダルを漕ぐ軽やかな躍動感が伝わってくる。

春遅しホルンの管の遠回り

関 妙子

ホルンはクラシックの音楽会で演奏される金管楽器の一つである。時には柔らかい音色を奏で、時には勇ましく吹く演奏もある。管の長さで音域を調整するようで、長いものでは三メートル六十センチ、短いものでも一メートル八十センチあるという。演奏会では春に相応しい楽曲が演奏されたのであろうか。下五の「遠回り」の措辞が面白い。きつと静かで、低音の音域が演奏されたのだろう。

冬晴や樺大樹の肺呼吸

浜田はるみ

浜田さんは川越の方なので、お住まいの近くには武蔵野の面影をとどめる所があるのだろうか。樺

の裸木がひとときわくつきり空に聳え立っていて、冬晴れの真っ青な青空に枝々を張り巡らせ大きく呼吸をしているようだ。自然の力がひしひしと迫り、そこにみなぎるものを感じた。

銀杏枯る千手観音立つやうに

澤田 英紀

銀杏は秋に黄葉して、少しずつ散ってゆくが、霜が降ったり、風が強かったりすると一気に散ってしまう。一本の銀杏の大木がたくさんの枝を天に向けて超然と立っている様子はまるで千手観音が立っているようで壮観である。散った落ち葉がまるで黄金色の絨毯のように見え銀杏の木は神々しくも見えてくる。

雲のかたち生くものに見え春隣

河寄 祐一

春の雲は、夏や秋の雲のようにはっきりした形をなさず、薄く一面に刷いたように現れる。ふわりと浮いて、淡い愁いを含んでいるが、童心にかえってゆっくり形を変える雲を見るのも楽しい。何か生きているかのようにも見えてきた。

火酒舐めて北洋漁労長たりし

加賀 壮介

日本の北方の海で行われる北洋漁業は、北海道の港を基地としてオホーツク海、北太平洋、ベーリング海、アラスカ湾などで、鮭、鱒、すけとうだらなどを捕る。寒さの厳しい冬などはウォッカなど火酒を呷りたい気持にもなるのだろう。

傾ぎたる地軸に凭れ冬眠す

里村 梨郵

地球の地軸が傾いているために地球上に四季が生まれる。地軸に凭れかかるようだという発想が面白い。動物たちが冬眠するのも、地軸が傾いているからかもしれない。